

〈翻訳〉エディンバラく絵画の手記く

R. L. スティーヴンソン
白 杵 英 一 (訳)

[Translation] *Edinburgh: Picturesque Notes* (1878) by
R. L. Stevenson

Eichi USUKI

目次

〔訳者序〕

エディンバラ市街図

第一章 序

第二章 旧市街——共同住宅 ヌザ・ランドグ

第三章 議会小路

第四章 伝説

第五章 グレイフライヤーズ教会

訳註

(以上、本号掲載)

第六章 新市街——町と田舎

第七章 郊外住宅(ヴィラ) 地区

第八章 カールトンの丘

第九章 冬、新年

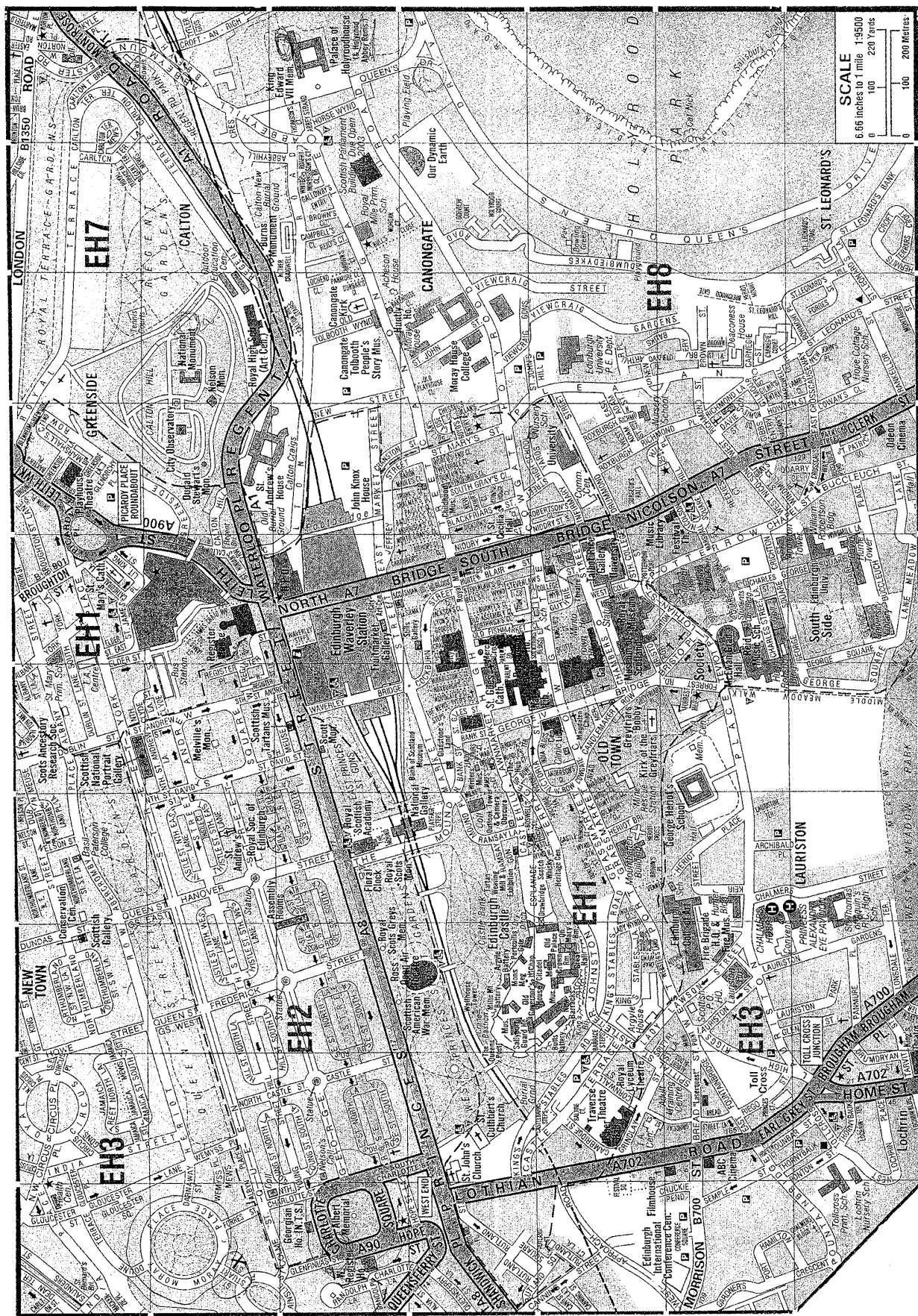
第十章 ペントランド丘陵へ

訳註

訳者解説

『訳者序』——おそらく本邦初訳のこの文章は、『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』など多くのベストセラー小説を出し始める前、若き日のステイヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-1894) が書いた紀行文風エッセイである。スコットランド法曹の司法試験に合格して修習を終えたものの、自らの体の弱さ(事実、西サモアでワインの栓を抜こうとして脳出血で亡くなっている)、それに何よりも法律の仕事が自分に合っていないことを思い知ったステイヴンソン。やがて、裁判官への道を捨て、作家を目指してパリやイタリアを歩き来するようになる。その頃——一八七八年——異郷にあって、故郷エディンバラを想い書かれたものである。詳細は「訳者解説」に譲るが、雑誌に寄稿したものに手を加えて同年末に上梓された。訳の底本は、日本では入手できなかったので、ケンブリッジ大学図書館所蔵の初版本 *Edinburgh: Picturesque Notes*, London: Seeley, Jackson, and Halliday 版 (一八七九年付・実際には一八七八年二月出版) を眺めながら、*Edinburgh: Robert Grant 版* (一九四八年) を使用した。裁判所の廊下を無意味に歩き回り、法衣のカツラをつけたまま地下図書室でウォルター・スコットなどの小説を読みふけていた様子、のちのハイド氏の実在のモデルとなる二重人格犯をはじめとする奇人悪人列伝、それに生まれ故郷エディンバラの^{まがまが}稠々しい都市伝説について、エディンバラの町を擬人化してありありと語っている。しかも、一見、故郷を皮肉たつぷりに^{けな}貶すかのような語り口は、実は故郷を愛してやまないステイヴンソンの心まで伝えるには、素人翻訳家には手に余るものがあつた。調べても分からないことがあると、昔の恩師にたびたび助け舟を出してもらつた。感謝を込めてここで白状しておく。

なお、第四章 伝説、および第五章 グレイフライヤーズ教会、は、ホラーの苦手な方、お体を悪くしているお年寄り、それと良い子のみんなは、読まないほうがいいかも知れない。悪い夢を見そうである(フ、フ…)。しかし、ステイヴンソンが、若い頃から、生と死の問題を敬虔・寛容なクリスチャンの立場から、真面目に考えていたことはよく分かるであろう。原註を除き本文に註番号は付けずに、最後に章ごとの訳註をつけてある。紙幅の関係で、今回は、ちょうどエッセイの半分を訳出した。メリハリの利いた訳文になっていることを望む。」



エディンバラ市街図

第一章

序

誰もが知るこの北部の古くからの首都は、三つの丘の頂上と斜面から、風吹きさぶ湾を見下ろしている。一王国の首都として、これ以上に支配的な眺めをほしいままにできる位置は考えられないし、これ以上に崇高な眺望を可能にする地形も選ぶことはできない。首都の高い断崖と連なる緑地からは、遠く広く海と広大な平原を見はるかすことができる。東には、日没の頃メイ灯台の輝きが見え、フォース湾がゲルマン海にひろがって続いている。西には遠く、スターリングの平野の彼方に、ベン・レディ山の今年の初雪を見ることができ

る。しかしエディンバラは、この高みに坐するという天の恵みに対して、もっとも厳しい気候という形で、残酷なまでに代償を支払わされている。あらゆる方角からの風に打ちのめされ、雨でずぶ濡れにされ、東からは冷たい海の霧に包まれ、ハイランド地方の山から南へと舞ってくる粉雪にさらされる。冬の天気は冷たく荒れ狂う。夏は変わりやすく不親切である。春は徹底した気象上の煉獄である。だから、繊細な人は早死にする。生き残った者として私は、身を切る風とどしゃ降りの雨の中で、早死にした人の運命をむしろ羨しく思ってしまうこともあった。

雨も風もない所を求め、太陽の恵みにあこがれ、暗い空を嫌い、絶えずスコールを避けるのに厭気を感じる人たちにとっては、これほど住みにくい、苛立たしいところはない。腹立ち紛れに、すべての悩みのなくなる、想像上の

「どこか他の場所」に熱い思いを寄せてしまう。そういう人たちは、新市街を旧市街と結ぶ大跨線橋の欄干にもたれて、この北国の風の神殿の祭壇のようなもつとも強く風が吹きつける場所で、明るく晴れた空をめざす旅に出る汽車が、煙を吹き上げながら隧道へ消えて行くのを見つめている。

エディンバラの煤塵を振り払い、煙突に東から吹きつける海風の唸り声を二度と聞かないですむ乗客はなんと幸せなことか！ しかし、それでもなお、ここは人々の心に残る場所であり続けている。どこへ行こうとも、同じ特徴をもった都市に出会うことはないし、どこへ行こうとも、この故郷に誇りを感じている。

ヴェネチアという都市は、かきたてる感情によって、ほかのどの都市とも違うと言われてきた。ほかにも、賞讃される都市はある。しかし、ヴェネチアだけが、名だたる美しい都市として、つぎつぎに愛好家を生んでいる。エディンバラとは言えば、どれほど親しみを寄せる人によっても、そのようには考えられていない。この人たちは、色々な理由からエディンバラに好意を抱く。そのいずれの理由も、一つだけでは充分ではない。こう言つてよければ、人はエディンバラを気まぐれに好むのであつて、愛好家が自分の所有する小さな骨董品の戸棚を大切にすると似ている。

その魅力は、もつとも狭い意味において浪漫的である。エディンバラは、たしかに美しいけれども、美しいというよりむしろ心に残る都市である。何よりもまずゴシック的な姿をしている。全体にギリシア風な雰囲気があり、断崖の上に建てられた古典的な寺院建築と相俟つて、いつそうゴシック的なところが引き立てられている。ひとことで言えば、何よりも骨董品なのである。

ホーリールード宮殿は、生長したエディンバラに取り残されて、今は労働者や庶民の居住区の中にビール醸造所やガス工場に囲まれて、くすんだ姿で静かに立っている。たくさんの記憶が詰まった屋敷である。ホーリールード宮では、古の貴人、国王や女王、道化師、威儀をただした外国の使節たちが、何百年もの間、いたって厳かに道化芝居を演じてきた。戦争が計画され、舞踏会が夜遅くまで催された。その小部屋では、女王の愛人の暗殺も行なわれた。そこでは、チャーリー王子が幻影の謁見式を挙行し、数時間の間とはいえ、失われたステュアート朝の国王代理としてきわめて華麗に堂々とその役を務めたのである。

今はもう、こうした人物たちもみな土に返り、王冠も六ペンスの拝観料で庶民に公開されている。しかし、石の宮殿だけは、こうした変化を生き延びてきた。一年のうち五〇週の間、宮殿は見物客のための見世物であり、骨董家具の博物館にすぎない。しかし、五一週目には、宮殿が蘇えり、その過去をなぞるのが見られる。国王長官代理が国家元首のように、上席の廷臣たちの間に着座する。門の前を、六頭立て馬車と儀仗隊がガチャガチャと音を立てて往き来する。夜間は、窓という窓に明かりが灯され、その近隣に住む労働者たちは、宮殿の音楽に合わせて家の中で踊ることができる。そして、この点で、宮殿は象徴的である。残り火の中に煌きが走り、時折、古い火山からも噴煙が上がる。

エディンバラは、王国の首都としての装いを一部は棄てているが、パロディーとしては、依然として着飾っている。なかば首都として、なかば田舎町として、二重の存在が続けている。長い間、首都としての幻影を宿しながら、ときに田舎の光芒を放つ。「アラビアンナイト」の暗黒島の王のごとく、

半分この世に生をもち、半分大理石の碑である。頭上にそびえる城塞には、大砲と武装兵が駐留している。閱兵式のための守備隊の整列集合も見ることができる。そして、初冬、早々にやって来る黄昏後の夜や、冬、いつまでも夜の明けない朝には、エディンバラ中に、軍用ラッパと太鼓の音が風に乘って運ばれてくる。

かつて国王評議会の議場だった所で、厳かに装った国王裁判官たちが、その身分の証しであるカツラをつけて着座している。城から下ったハイ・ストリートですぐ近くで、ちょうど正午ごろ、トランペットの音が響き渡ることがある。すると、派手に仮装した市民と思しき一団が現われる。上半身は中世風の陣羽織、下半身はいろいろな色の毛糸で織ったズボンという出で立ちである。その男たち自身は、冷たい視線を向ける見物人の間を泥に足を取られながら、とぼと歩いている。立派なサーカスの下男だって、もっと見栄えのする歩き方をするだろう。しかし、この男たちこそ、スコットランド布告官とその従者なのだ。今まさに、四〇人ばかりの少年と泥棒と貸馬車の御者の前で、連合王国の新しい法律を布告しようとしている。

その間にも、一時間毎に、大学の鐘の音が、街の喧騒の上に響き渡り、建物に出入りする学生たちの二重の波が、アーチの架かった奥まった大学小路に溢れ出す。そして最後に、春のある夜（あるいは、ある朝、夜明け頃）、昔ながらのハイ・ストリートの片側にある教会から、大勢の人が聖歌を斉唱する声が漏れてくるのを夜更かしの人たちは耳にする。すると、そのすぐ後か、もしかしたらそれより先に、道の反対側の教会からも、大勢の人が讃美歌を斉唱する声が聞えてくる。「ヘルモンにおく露のように」ということばには、一理あるだろう。信仰の兄弟がともに調和して暮らしているのを見ることは、

なんと素晴らしいことか。そして、その夜更かしの人たちは、自らに言い聞かせるであろう。この歌声のすべてが、年に一度開かれる二つの聖職者会議の最終結論を示すものである、と。その二つの教会会議は、多くの立派な美德を分かち持つ兄弟ではあるが、寛容で平穏な生活の細部では、必ずしも兄弟のようであるとは言えないのである。

さらに、思索好きな人たちは、エディンバラの都市の風貌と、人の心をざわめかすその一風変わった歴史との間に協和するものがあつて、そこに魅力を見出すかもしれない。これほど、対照的なものを素朴に並べて見せている都市は、めったにない。都市の真ん中に、申し分のない自然のままの険しい崖（陸地の上に立つバース岩）が聳（も）えている。この岩は、列車が通過するたびにぐらぐら揺れる庭園に基礎を据えていて、城の胸壁と角櫓（すみろ）を王冠と戴き、北側に広がる新市街のもっとも明るく賑やかな往来の上に、戦いの黒い影を伸ばしている。石炭の煤煙ですすけた一〇階建ての高さはある蜜蜂の巣箱のような住居からは、金持ちの住む広い街区と庭園を庶民が見下ろしている。

そして、プリンス・ストリート沿い一マイルに並ぶ立派な商館はすべて、なにか大きな行事のために、たくさんの旗で飾り立てられている。その通り沿いで日光浴をする華やかな服装の人々は、立像を配した庭園の谷越しに、旧市街の高窓に干された洗濯物が風にそよぐのを眺めている。それに、四方八方、なんとという建築様式のぶつかり合いであろう！ 町の営みがもつとも忙（せわ）しくなく進行する最中、このひとつの谷の内に、土地の高低ごとに、一軒上、一軒後ろごとに、この世界のあらゆる異なった様式の建物が展示されているのを目にすることができる。エジプト様式の神殿、ギリシア様式の神殿、ヴェネチア様式の館、ゴシック様式の尖塔が、無秩序だがもつとも賞讃を博すやり方で、

一つひとつ積み上げられている。

なかでも、むきだしのかぶりである城と「アーサーの腰掛」と呼ばれる丘の頂きは、造化の神の手になる自然が人間のつくった芸術を見下ろすかのように、それにふさわしい威厳をもつてこれらの模造建築物を見下ろしている。しかし、自然という造化の神は、想像以上にどんなものでも差別なく庇護（ひご）してくれている。しかも、どんな強烈な対照にも怯むことはない。小鳥は断崖の裂け目につくると同じように、コリント式柱頭にも喜んで巣をつくる。永遠の岩も昨日できた模造柱廊も、同じ大気と陽射しが包んでいる。そして、柔らかな北国の日光がすべてのものを眩く浮き彫りにする昼間にも、あるいはまた、青い夕暮とともに発生する東からの霞が、これらの不調和なもののすべてを一つに融合させて、ガス灯が通りに沿って輝き始め、谷間の高窓にかすかな灯りが点（とも）りだす夕方にも、この町はもつとも身近な意味で自然の一部なのだという感情が湧き起（た）ってきってしまう。ここには、風変わりなものが夥しく溢れている。石造建築と天然の岩が夢のように一緒になっている。それでいて、ここは劇場の緞帳の場面ではなくて、日常的な現実世界の都市なのである。鉄道と電信によってヨーロッパのあらゆる首都と結ばれており、帳簿をつけ教会に通い、魂を新聞に売ってしまうような普通の市民が住んでいる。

ロマンスの掟（おきて）によれば、舞台はなかば打ち棄てられ、朽ち果てようとする場所でなくてはならない。小鳥がたくさん飛び交うのも、太陽と風の役回りも、そして大きな往来で流浪の民が二、三人野営しているのもよい。しかし、この市民は、辻馬車と市街軌道に、汽車と駅馬制度まで備えていて、まったく掟にそぐわない。ここでは、市民が勅許をうけた見物客である。史跡を勝手に使ひ、人の大きな無関心をいいことに、もつとも絵画的で美しい場所の間で子孫

を育てている。整った服と意識的な道德的廉直さを装い、また、まぬけと紙一重の自制心のわずかなそぶりを見せながら、群れ集まっている。その有りさまを目にすることが、この舞台の特別な呼びものということになる。(1)

この町の物語もまた、その外観と同じくらい風変わりなものである。何百年もの間、ヒースで蓋^{おさ}われた首都であった。そのため、イングランドからの侵攻という不運に見舞われたとき、一度ならず、空を焦^あがすほど炎上し、海上の船を導く烽火台^{ひのうち}とされた。この町は、妬み深い貴族たちの決闘場でもあった。王の臨席の下、カールトンの緑の丘と、城の麓^{ふもと}にあった王立厩舎のそばでは、格式にしたがった天覧馬上槍試合が、厳かにトランペットの号令に合わせて行なわれた。それだけでなく、あちこちの路地でも、剣を交えることができる空間さえあれば、決闘が行なわれる。また、大通りでも、青毛布^{グレイ}の旗を押し立てた民衆の暴徒が、よそ者の氏族集団やその家来との間で、交互に大げんかをしかけ合っている。

ハイ・ストリートを下った先の宮殿では、ジョン・ノックスが、近代民主主義とは何かについて、メアリ女王を諭^{さと}している。町では、古い大聖堂の控壁のあいだにある数え切れないツバメの巢に似た漆喰の壁をもつ小さな商家で、あの専制君主論者として知られるジェームズ六世が、よく喜んで金融業者ジョージ・ヘリオットと一瓶の葡萄酒を共にしたものである。城とその周囲の波のように起伏した町を静かに見下ろしているペントランドの丘の上では、あの狂信的な憂いの宗教詩人たちが、荒地に長くさらされていたために疲れ切った様子をしている。そして、もう一つのソドムとゴモラとして、エディンバラが、天上から落ちてくる炎で焼き尽くされるのを見ようと、日夜、「哀しき讚美歌」を歌いながら坐り続けている。この町では、市場が開かれるグラスマーケット

通りの広場で、神との直接の信仰誓約を守る不屈の勇者たちが、己の命という、ときに不必要な、しかし少なからず名誉ある犠牲を神に捧げる。勇者たちは、太陽と月と星々、それにこの世の友情に向けて、弁舌さわやかに別れを告げた後、または何も語らず合図の太鼓の音に合わせて、公開処刑場の露と消える。

町外れの河口のそばでは、クレイヴァーハウス家のグレアムとその配下三名の竜騎兵が馬に跨^{また}って進んでいる。町は、彼らの馬列のはるか背後で、戦闘準備の太鼓を鳴らしている。哀れな小隊は、これから命をかけて行軍するのである。しかし、先頭に立つ特異な気性の持ち主の隊長は、のちに、取って返して反逆の突撃を敢行し、スコットランドを心底揺るがすことになる。幸いにも、彼は、その戦いの最中に戦死した。

この町では、エイケンヘッドが、信じられない子供っぽいことから絞首刑に処せられた。この町では、数年後、デイヴィッド・ヒュームが、哲学と信仰を破壊する。おとなしく評判も悪くない一市民ではあったが。見栄えを良くした不信心と人工的な文学といえ、この町へは、さらに数年後、バーンズが農村から上京して来る。

この町では、ある時、谷を越えて貴族や富裕層の大脱出が行なわれ、新市街が、風のよく通る平行四辺形の形をした居住区を街の外側にいくつも広げ出す。そして、反対側の旧市街の丘に向かって、その長い正面を向けるようになる。都市の歴史上、ほかの町にはけっして真似できないような夜逃げ^{ナイト・エスケイプ}と、住居や住民の入れ替えを見事にやってのけた。靴屋が伯爵の家のあとに入り、物乞いが判事の家^{ジャッジ・ハウス}の暖炉の傍らで腰を落着けている。立派な屋敷であったところは、どれも貧民のための避難所として利用され、大邸宅は、社会の最下層

のもつとも貧しい人々に分け与えられた。その結果、前の持ち主の煖炉の炉床は、充分な広さがあつたので、壁で仕切られて新しい持ち主の寝室に変えられたのである。

(一) 聞くところによると、これらの文章が、我が生まれ故郷の町の人たちの感情を害し、敵手たるグラスゴウ市民に、それに見合う喜びを与えたと言われる。告白するが、私は、その知らせを聞いたとき、痛みと同時に愉快すら感じた。傷ついた我が同胞市民のための慰めとして、私の非難には致命的に悪い点は何もないと言わせてくれないだろうか。元帳を隠匿するのは、多少は彼らに非がある。つまり、そりゃあすぐれた商慣習だし、教会通いも、これまで聞いたところでは、叱責の種にはならないだろう。洗濯物のリネン類のお体裁は、商売繁盛のしるしである。それに、意識的な道徳的廉直さも、良き暮らしのひとつの証しである。この都市が、住民としてもっと見かけ倒しのものを何か呼びかけ求めているとしても、それは市民が悪いのではない。アルプス高原やピラミッドでフロックコートの正装をした男がいたら、たとえ博愛主義の銀行家ピーボディのような人物と同じ美德と、功利主義の思想家ベンタムのような人物と同じ才能に恵まれていたとしても、場違いに見える。同胞市民よ、心を癒してもらいたい。皆さんは、どこの誰よりもうまくやって繁栄しているのだ。(たとえば)シカゴの人々は、同じ物語の舞台にかければ、どこよりも悲惨なありさまを呈するであろう。グラスゴウの人々には、ひとこと言っておこう。しかし、それは金のごとく貴重なことばである。「まだグラスゴウについての本を書いてないだけだ」と。

第二章

旧市街——共同住宅「ザ・ランド」

旧市街こそ、エディンバラにとって、最大の特徴であり、絵画的視点からすれば肝心要かなめのものだ、とあまり根拠もなく言われている。一部分を過大に褒めそやすことで全体に冷水を浴せるというのは、けなすためによく使われるやり方の一つである。本当に評価に値するものであるならば、人物であれ芸術作品であれ美しい都市であれ、全体としての長所によって判断されねばならない。

旧市街が人の心を捉える地の利を得ていて、新しい街並みによって取り囲まれ、背後に幾つも丘が控えているからである。旧市街をまるごと何処か他の場所に移すならば、大胆に聳えるスターリングの町に似て見えてしまうであろう。肝心なのは、スターリングよりもっと着飾った旧市街は、活気があつて幻想的な大きな近代都市の真只中に置かれていることである。旧市街は近代都市と絵画的な意味で反応し合っている。互いに生かし合っている。

旧市街は、氷河時代の洪積層による尾根のような斜面を占めている。氷の溶けた水が沈下した時、西側を護ってくれる城壁のような断崖によって守られる形になった。斜面の南側と北側にそれぞれ新しい町並みが、もつと低く、広く、なだらかな幾つもの丘の上につくられて行つた。

こうして、城の一劃は都市全体の頂上に位置し、海と陸を一望している。四方を何マイルにもわたって見晴らすことができるから、船のデッキにいる人たちからも、ファイフ地方の静かな田園地帯で働く農夫からも、エディンバラ城の胸壁の上に翻る旗印や、低地へ広がり流れていく旧市街の煙が見える。丘の

頂きに置かれた都市。エディンバラが、^スオールド・リーキー^スすなわち「煙町」という親しみを込めた愛称を得たのは、この遠くからの眺めによつてであろう。もしかしたら、町の門を一度もくぐったことのない人たちが名付けたのかもしれない。人々は毎日、それぞれの田舎のビスガの山から、約束の地である丘の頂きの建築群と、平原の上まで棚引いている羽毛のように細長い煙の筋を望み見てきた。その人たちには「煙町」に見えたし、同じ煙を耕していた先祖の人々にもそう見えたのだ。それだけが町について知っているすべてだったので、エディンバラをこの二語で言い表すことができたのである。

実際もつと近くから観ても、旧市街はほどよく燻^{いぶ}されている。一年中雨で洗われ流されているはずなのに、新しい郊外住宅地の真ん中で、険しく煤^{すす}けた表情をしている。旧市街は、危機的状況にある城壘都市の生長を律する法にしたがつて、広さでなく、高さで集密さで生長していった。公共の建物は、その余地があるかぎり大通りに吸収され、大通りは小路に細められた。家屋は、カルカタにあるブラック・ホール監獄の房のように、隣人の背の上に隣人を乗せ、幾重にも階を重ねて聳え立った。ついには、住民は、縦一四、五フィートの深さの地下で寝るようになった。地元では^スザ・ランド^スと呼ばれるこの「共同住宅」のうちもつとも高かったものは、とうの昔に火事で失われてしまった。しかし、今日まで、ひとつの階あたり八個や一〇個の窓が付いている住宅を目にすることも稀ではない。ウェイヴァリー橋の上方に威圧するように突き出ている建物の絶壁は、今でも、多くの天然の断崖の面目をつぶすことができる。

地下室は、丘の険しい斜面に据えられているので、眺める者の頭よりも高いところにある。屋根裏部屋といえ、家具はもうすべて質屋にあるだろうが、

そこからは、名高いハイランド地方の丘陵を見晴らすことができる。

貧しい人が、エディンバラではその真ん中で高いところに^{ねぐら}罫をつくっている。しかも、窓からは、緑の田園地帯をのぞき見ることも、広い街区や庭園を備えた裕福な深みにある地区を真下に見ることもできる。その頭上にあるものといえ、石でできたこの町のトゲルンマスト（上檣）である二、三の尖塔のほかにはない。この貧しい人のもとには、風に乗って、田園のさわやかな空気が、海の匂いや、春には花咲くりラの香りも運ばれてくるかもしれない。

チェインバーズ氏とその仲間たちによる革命的な都市改良を遺憾に思うのは、文学的感性にしたがえば当然であろう。他人の不便をそのままにすることは容易い。ただこの町のよいもののほうには、保存しようという心が向かない。たしかに、黒い迷路を走る通りを造るとき、心に残る古い街角のいくつかは取り払われ、家屋の共同化が行なわれた。しかし、光の筋はほんのわずかし、澄んだ空気はほとんど、入ってはこなかった！ 絵画の中のような世界は、手つかずのまま残っている！

暗いアーチ門を抜けて、暗い階段や路地を下りてみるがいい。道幅がとても狭くて、左右の手で両側の壁に触れることができる。とても急勾配で、荒れ模様冬の日には、敷石が、ほとんど氷と同じくらい滑って足元がおぼつかない。洗濯物が、窓から幾重にもぶら下がっている。建物は、脆^{もろ}い腕木の上に張り出している。角の暗がりには小さな彫刻があり、頂上では、切妻屋根と^{いんげん}薨段の飾り板が空に刻まれている。

中庭へ抜けると、子供たちが戯れ、大人たちは戸口の階段に腰を下している。教会の尖塔が、屋根の上に顔を出しているかもしれない。もつとも狭い通路の奥に、大きな古い館がまだ立っているのを目にするだろう。入口の上の横

木の上に、館の以前の地位をあらわす紋章が付いている。盾形の紋地に神聖と勇猛をあらわした銘がある。

地元の古物愛好家は、名のある貴族の人々が泊まっていた所だと言う。しかし、見上げると、伯爵夫人の部屋の窓から不意に、だらしない女の顔が現れる。まるでファラオの宮殿の壁の中にあるペドウィンのテントのようである。古い軍船は、ネズミたちに与えられた。ほろ酔い機嫌で紅い顔を隠す白粉おしろいをつけた人たちがこの路地にあふれていた日々は、すでに遠い昔のことである。主要な大通りでさえ、今はアイルランド製リネンの洗濯物が窓に翻っているし、歩道は浮浪者たちに占拠されている。

この浮浪者たちこそ、この場面の真の主役である。仕事に出る途中、立ち止まって、教会の事件や政治について鋭い議論を交わしたスコットランドの労働者もいたかもしれない。しかし、大部分は、違った階層の人たちである。こそこそ逃げ隠れる犯罪者、髪がぼさぼさで裸足の子供たち、一様に縞模様のフランネルの下着と短いタータン・シヨールという姿のおしゃべり好きで逞しい女たち。その中に、監視役の巡査も二、三人、それに社会的地位の比較的高い階層の出身だが、反乱をおこしたり挫折したりして陰のある人物も散見できる。その表情には、きまって烙印のごとく、華やかだった時代のしるしが刻み込まれている。エディンバラほどの大きさの町で、往来がおよそ五つか六つの大通りに集中している所では、のんびり散歩していても、同じ顔が目につく。

実際、そのような視点から見れば、エディンバラは、小都市というよりも、むしろ小さな町を集めた大きな町にすぎない。隣人に気づかないでいることはできないし、また、気づくまいと試みた人が居たとは聞いたことがない。偶然このような他人ひとに知られない方法で、破滅へと向かういくつかの舞台で、その

落ちぶれた旅人たちを一人ならず見物できた私は運がよかった。

ある男は、初めて見かけたとき、歳の頃は六〇すぎ、上品で、最高級のウール地の背広を着た、姿のいい紳士であった。それから三年の間、男は没落し続けた。四角い裾付きすその上着は汚れ、ボタンが消えていた。顔が脹らみ出し、吹き出物だらけになる。背が曲がる。頭の毛は抜け落ち、まばらで白くなる。最後に見た時には、モールスキン地の服の労働者たちと屯たじろしていた。古びた黒い背広は泥にまみれ、酔っぱらっていた。まだ、男の笑い声が聞こえてくるような気がする。これほど歳をとってから、こんなふうに没落していくのを見るのは心が痛む。六〇の男がこのような災難に見舞われることはない。それまでに人生の安全地帯に入りこんで、そこから静かに誇りを持して墓に入るはずだと思われるのに。

このような没落の最初のしるしは、犠牲者が、新市街の大通りから姿を消し、手負いの獣が森へ逃げこむように、旧市街のハイ・ストリートに逃げこむことである。こういう犠牲者こそ、この地区の特徴である。この地区もまた、社会的に没落したのだ。窓に洗濯物が下がっているところでは、戸口の上についている盾形の紋章は、心を逆撫でにする。例の老人も、私が最後にその姿を目にしたとき、三年前の紳士役を演じていた時と同じ上着を着けていた。そのために、いつそう惨めに見えた。

たしかに、人口の過剰ということならば、貴族の夫婦の時代でも、同じくらしい密度があつた。幸いなことに、今では、昔のエディンバラを悪名高いところにしていくつかの習慣も中断されている。しかし、快適な集合生活でも、その逆の集合生活でも、同じように愉しめないわけではない。昔これらの家屋に、どれほど多くの貴族の夫婦、聖職者や法律家が詰め込まれていたのか

を気にする人はいない。人数が多いほうが愉しかったのだろう。

陶器のパンチボウルのまわりでは、しきりに乾杯の盃の音がして、誰かが箱型の小さなハープシコードを弾いている。暖炉の上には、孔雀の羽が飾られ、赤い炉の火の先端は青白く光っている。それはそれで不愉快な光景ではないし、繰り返されることで醜くなることもない。同じようなことが一部屋おきに演じられていたら、いつそう良い。ザ・ランドが、ますます魅力的に映る。

しかし、時代は移る。ひとつの家屋に、おそらく二〇家族以上が群れ集まっている。おそらく、その家族のうちの一つも、貧しさから完全に自由でいる家族はいない。かつての高級ホテルは、土台から煙突の天辺まで不快そのものである。いたるところに、窮乏と、浅ましさと、貧しい食事、それに、ふしだらで不潔な空気が漂っている。一つ目の部屋では赤ん坊が生まれ、別の部屋では人が亡くなる。三つ目ではひとしきり薄汚い酒盛りがあり、階段では、刑事と聖書朗読の巡回者がすれ違う。口喧嘩の音が、あちこちの居室から居室へと聞こえてきて、子供たちは、人生の最初から異常な体験をすることになる。このような環境では、よほど心のつよい子のほかは、みな傷ついて大人になるしかない。

たとえ若者に対して神がその掟を緩めて、人々の不安が予期するような悪事が起こらなかったとしても、そのような生活ぶりを目にするだけで、比較的満足のいく環境にある人たちにとっては不安の種である。エディンバラほど、社会的不平等を誇示している所はない。プリンスイズ・ストリート散歩する人たちに向かって、ハイ・ストリートが、その屋根裏部屋を無神経に展示している様子についてはすでに触れた。

たしかに、あいだに緑地はある。対照としてはこの上なく際立っているには

ちがいないけれども、二つの対立するものがそちがいを際立たせ、事実を端的に物語ってしまうこともあるのだ。金持ちと貧乏人との間には、草の葉一片の隙間すらないからである。サウス橋の上から、行人人たちが大声を上げごつた返す下のカウゲート通りを見下ろせば、一瞬にして、社会のひとつの階級を別の階級から眺めることになるのだ。

ある夜のこと、巡査のほかは皆寢床についたあと、カウゲート通りを歩いてみた。ある高層の「ランド」の前でふと立ち止まる。月がその建物の煙突に懸つていて、月の光が上方の窓をぼんやり照らしている。巨大な建物のどこにも明かりはない。しかし、そこに立っていると、内部からの静かな音のかたまりが聞えるような気がした。間違ひなく、たくさんの柱時計がチクタク音を立てているし、住人は、いびきを掻いて寝ている。だから、中の集密な暮らしぶりか、かすかに耳に聞こえてくるようだった。すべての家族で全体の音をつくっている。音の積み重ねが、肥大して調子の取れない心臓のように、時計の音に合わせて脈打っている。気のせいにすぎなかったかもしれない。でも、その時は不思議なくらい印象的だった。生きている人間の量と、人間を分割して閉じ込めている薄い壁との間の不釣り合いを、想像によって感じていたのだろうか。

ハイ・ストリートの「ランド」が崩壊したとき、現実的な恐怖以外には何も、空想的なことは何も起らなかった。建物は、芯まで腐っていたのだ。下の入り口が突然、塞がってしまったて、街路清掃人の二輪手押し車を通すこともできなくなった。物の壊れる音と反響が、夜間、家屋中に鳴り響いた。人の住む巨大な古い蜂の巣の住人たちは、階段で行き違ったとき、自分たちの危機について話合った。恐怖に駆られ慌てて住居から出て行った者も、懐具合や自尊

第三章

議會小路

心から、また元に戻ってきた。日曜の早朝まだ暗いうちに、建物全体が、ぞつとするような唸り声を上げて一気に崩れ、地面まで階を重ねて倒壊した。物理的な衝撃は、広くいたるところで感じられ、道徳的衝撃は、朝になって乳しほり女により素早くすべての郊外に伝えられた。その日の暗い午前中ほど、暗澹とした鐘の音がエディンバラ中に響き渡ったことはない。

死は、大胆な収穫をした。大力無双のサムソンのように、一つの屋根を引き倒すことで、数多の家庭を破壊したのだ。落ちた屋根を目撃した人は誰も、切妻の面を忘れることができなかったろう。部屋によって、漆喰が塗られているものも、壁紙がはられているものもあった。湯沸しがまだ頭上の暖炉の台架の上にある部屋も、女王の安っぽい肖像画が暖炉の上に張り付けてある部屋もあった。この災害によって、まったく突然に、廻る年月から切り離された三〇家族の生活が垣間見られたのである。ランドは崩壊した。そのランドとともに、なんと多くのものが崩壊したことであろうか！ 遠い田園地帯からも、街並みの間に隙間ができていたのが見られた。太陽が、煙突と煙突の間から、いつもと違うところに顔を覗かせている。そして、世界中で、ロンドンで、カナダで、ニュージーランドで、なんとたくさんの人たちが、本当にこう叫ぶことになった。「わたしの生れた家が、きのうの晩、こわれてしまった！」

歳月は、セント・ジャイルズ教会の境内あたりで、もつとも著しい変化を生んでいる。その尖塔がなければ、教会とさえ分らないだろう。露店はすべて消えてしまい、控壁に庇を借りていた店は一つも残っていない。さらに、熱心な治安判事と心得違いをした建築家が、男らしい外観を剥ぎ取ってしまい、貧素で飾り気がなく、哀れな姿のものにしてしまった。セント・ジャイルズ教会は、その昔、いまは忘れられてしまった豊かで趣のある姿をしていたにちがいない。それだけに、その近所は賑やかで、陽がささず、とても浪漫的であつたろう。町がもつとも建て込んでいたのは、まさにこの界限であつた。しかし、その過剰な建物群は、すべて取り払われてしまった。教会の両側の広場とともにハイ・ストリート沿いに残された通路からだけでなく、ランドの家並みの中の大きな丸窓からも、今は北の新市街を眺めることができる。

エディンバラ城とホールールド宮との間の地下通路については、ばかげた話がある。その曲がりくねった通路を探検しようと名乗り出た勇敢なバグパイプ奏者がいた。軽快なスコットランド舞曲を演奏しながら、通路の上の端から入って行く。すると、物好きな人たちが、足元から聞こえるバグパイプの音を頼りに、その奏者の下って行くあとを追って通り沿いに歩いて行つた。ついにセント・ジャイルズ教会のあたりまで下つたとき、突然音楽が止んだ。通りにいた人たちは、両手を上げて当惑した表情で立ち尽くす。何かのガスで窒息したのか、あるいは地下の泥沼に落ちたのか、身体ごと悪魔に持っていかれたのか、

かは、謎のままである。ただ、その日から今日まで、そのバグパイプ奏者を見た者も噂を聞いた者もない。もしかしたら、詩人トーマスの妖精の国へさまよい落ちていて、いつの日か、陽の当たる地上に再び現れるのかもしれない。そのときは、セント・ジャイルズ教会のわきの空地にいる辻馬車の御者たちが、不思議な瞬間を体験することになるだろう。バグパイプのブーンという低音が、馬たちの足元の地中深くから聞こえてくるのだから。

しかし、忽然と消えたのはバグパイプ奏者だけではない。多くの石造物が、同じように宙に消えている。たとえば、通りの敷石に嵌めこまれたハートの形がある。ここは、ミドロージアン地方の中心ツールブース監獄の敷地であった。物語に残る古い場所で、ある高貴な書物の名の元ともなっている。監獄の壁はすでに倒れて地面の下にあり、酒に酔って上機嫌の債務者のための薄汚れた獄舎も、年配の札付き脱獄者のための独房も、今はない。けれども、太陽と風は、監獄の土台の上で自由に戯れている。これが唯一、舗道に残された昔日の面影というわけではない。エディンバラの古い埋葬地は、セント・ジャイルズ教会の裏手にあった。坂を下ってカウゲート通りへ続いていて、現在の議事堂の敷地も含まれていた。それも、監獄や徴税所と同様、完全に消え失せてしまった。その歴史を知らない人たちのために、残っている唯一の思い出のしるしを私は知っている。日々、弁護士たちの足で踏みつけられている議会小路に、アルファベット二文字と日付が刻まれている。スコットランドを何度も自らの姿に似せようとしたあの人物、根気づくと思いとどまることを知らなかったジョン・ノックスの安息の地のしるしである。自らの説教が何度も響き渡った教会のすぐ傍らに眠っている。

この改革者のすぐそばに、がに股で花冠を頭に戴いた銅製のチャールズ二世

が、酒の大樽のような腹をした軍馬に跨^{またが}っている。王は背を向けていて、不器用に速歩^{はやあし}でこの陰呑な界限から離れようとしているように見える。この二人は、何時間も続けて議会小路で二人だけになることがある。というのも、この小路は、法律家のほかは誰も通らないところだからである。

一方は聖堂の南側の壁が、もう一方は議事堂の屋根付き通路が、この一風変わった舗道の湾曲部を囲い込んでいて、陽が当たると、それらの影が舗道の上に映し出される。小路の両端では、セント・ジャイルズの控壁のあたりから、ハイ・ストリートとその雑多な通行人を眺めることができる。しかし、人の流れは東西に過ぎて行くだけで、議会小路は、もっぱらチャールズ二世と小鳥たちに委ねられている。たまに、辛抱づよい大勢の人たちが、あるいは果物を食べ、あるいは新聞に目を通しながら、そこで日が一日ぶらぶらしていることがある。その人たちの物静かな態度から判断して、無料スूप券の配布を待っているのだろうと思うかもしれない。事実は、まったく別である。高等刑事裁判所の内部で、ある男の命をかけた裁判の最中なのだ。その人たちは、傍聴席が狭すぎて入廷できなかった物好きな見物人の一部である。昼過ぎごろになると、囚人が引き立てられると、評判の良くない人物のときは、一斉に罵声がかかる。たまにまた、カツラとガウンをつけた弁護士が、代理人の話を聞いて口を手を当て意味あり気な頷きを繰り返しながら、屋根付き通路を往来することがある。そして、ある決まった時刻になると、一斉にすべての法律家がこの区域を横切^{よこぎ}って行く。

議会小路は、スコットランドの歴史に残る大事件の現場となってきた。一六八八年、監督派の主教たちが代表者会議から追放された時、「一四人全員は議会小路に蒼ざめた顔で集まり、意気消沈して立ちすくんでいた」。二度と

日の目を見ることができなくなった、哀れな監督派の人たち！

居合わせた西部地方の長老派の人たちにしてみれば、監督派の主教たちを絞首刑にすることができれば「大金を積まれるよりも嬉しかった」のだが、乱暴に扱いすぎて、かえって妥協しなければならなくなってしまった。地位を奪われた敵に対して寛大にするつもりはなかったので、これまで長老派の仲間が絞首台にかけられるのを見てきていただけに、それなりに無念に思った人もいた。

また、スコットランドとイングランドの「悲しき合同」のとき、人々が、最後のスコットランド議会の議場から出て来る支持者を護衛しようと集合した場所がここである。ボズウェルが言ったとおり、人々は、民族主義で高揚して、いまにも暴力行為に出かねなかった。窓から顔を出した『ロビンソン・クルーソー』の著者に向かって石を投げようとした。

一七世紀のある敬虔な信者は、スコットランド司法「考査」(今は「試験」と言っている)を受けようとしてみると、議会小路に穴が開いていた。地獄の入口の幻を見たのだ。このことが、そのまま、その人の改宗の原因となった。その場所に似つかわしくない幻想であったとは言えない。というのは、およそ文明社会で、病院に次いで、裁判所ほど忌まわしい場所があるだろうか？

ここには、公開試合で激しくやり合い決着をつけようと、嫉妬、恨み、そしてあらゆる無慈悲が集まってくる。犯罪、破産、家庭不和、悪党とその犠牲者は、屋根付き通路を備えたこの低い建物へ引き寄せられてくる。どれほど多くの人に、セント・ジャイルズの鐘は、打ちのめされてきてからの最初の時刻を告げてきたのか？ 鐘の打つ音を数えようと一瞬立ち止まるが、すぐハイ・ストリートの流れの中に消えて行くのが目に見えるようだ。心は失意で打ちひし

がれて、茫然としている。

一对の回転扉が、玄関ホールへ通じている。その天井は彫刻で装飾がほどこされ、壁には法律家たちの肖像画が掛けられ、立像も飾られている。彩色ガラス窓からの光で明るく照らされ、三つの巨大な暖炉によって暖められている。ここは、スコットランド法曹会の「通路の消えた広間」である。野蠻な慣習により、仕事のない修習生は、一〇時から二時までここを歩かなくてはならない。単独で、または二人、三人と並んで、ガウンとカッターをつけた人たちが通りぬける。おしゃべりの声や足音を押しのけて、高等民事裁判所の廷吏のかなり高い声が、新しい訴訟を発表して関係者の名を呼んでいる。ここでは、知的な人々が、毎日一〇時間から二〇時間も、一片の仕事も一シリングの報酬もなく、歩き廻ってきたのだ。

時が経過すれば、もしかしたら、レリックやトーパーマニーの州長官補、兼州裁判官に任命されるかもしれない。ただ身体を動かすことに対する好みと悪い空気に対する忍耐があればよいとも言えるだろう。ガウンのボンバジン布の埃を呼吸し、くだらない噂話で心を養い、事件の説明を聞いて一杯のシェリー酒を飲む。すると、言いようのない衝動にかられて、自分を偽ることから抜け出したくなる。その日の午後のすべてをゴルフに専念できる時間を求めるようになる。これを毎日、毎年繰り返すことは、経験したことのない人には、容易いことのように思えるだろう！ しかし、実際に試してみた人は、そうは考えない。無為のもつとも堪え難い形式であるとみなすだろう。

さらに多くの回転扉が小部屋に通じている。控訴裁判担当判事が単独で開廷する小法廷や、最高裁の判事が三、四人で開廷する聴聞のための大法廷がある。スコットが訴訟手続きの単調な話を聞きながら「ウェイヴァリー」小説の

多くの頁を書いた席が残っている。そこでは、激しいことはも耳にするが、判事閣下はユーモアをまったく嫌っているわけではないので、さりげない冗談を耳にすることもある。スコットランド方言の強いものは、すでに法廷から追放されている。しかし裁判所は、今でも一定の民族的な趣きを残している。事件をいつまでも長引かせて厳粛に楽しむ方法もある。法を純粹芸術のようにして、その特徴を賞味し消化する。急ぐことはない。論点を一つひとつ正しく分析し、原則にまとめなくてはならない。一人ひとりの判事は、楽しんでいる仲間に対して、自分の付帯的な意見を述べなくてはならない。

議事堂には、複数の裁判所のほかに、同じ屋根の下に、少なくとも三つの図書館が設置されている。二つは、けっしてみすばらしくなく整っている。しかし、整理がついていない半地下にある一つは、たくさんの階段と回廊で結ばれている。そこでは、もつとも学究的な表情をした法律家が、四角いカンテラの灯りを頼りに、小説を取り出していたりする。旧枢密院が信仰誓約派の人たちを拷問にかけたのは、まさにこの場所であった。

議事堂は斜面に建てられているので、北側は一階だけにしか見えないけれども、南側は、数えると少なくとも六階はある。円筒形天井の地下室の列がいくつも、図書館の下方まで伸びている。この丘の多い首都のなかで、これほど特色ある場所はほかにない。石の階段を一つまた一つと降りて行って、一本の燐寸の仄かな明かりを頼りに、石の地下室の迷宮をさまよい歩いてみるとよい。外広間の真下を通ることになる。頭上から、きびきびした、でも幽霊のような、法律家たちの止むことのない足音が聞こえてくる。

すると、くぐり戸の付いた頑丈な扉に行き当る。扉の向こう側には、警察署の独房と、刑事裁判所の被告席につながる跳ね階段がある。そこを上がって行

くとき足取りはとても軽いが、降りてくるときは確実にひどく重くなっている。多くの人の命は、上の法廷で長時間、当人とは離れたところで議論された。しかし、今はもう、その悲劇の舞台は、平日の教会のように、人氣が途絶えて静寂が支配している。判事席にはすっかり覆いがかけられ、壁の上の太陽光線のほかに動くものはない。

さらに少し進むと突然、ある部屋に出くわす。ほかの部屋とちがって空ではない。過ぎ去った過去の刑事事件に縁のある証人^ツがいっぱい詰められている。気味の悪い棒きれ、凶器の数々、ガラス瓶に入った毒を盛られた臓器、板を貫通した弾痕のある扉、その後ろで人が死んで倒れていたのである。最後の審判の日に備えてでないかぎり、私には、いったいなぜこういったものが保存されているのか分からない。降り続けて行くについに、黄色いガス灯の光が見えてくる。頭の上でぶつかり合うような密やかな物音がしている。次の瞬間、角を曲がると、白い漆喰の壁の通路の真ん中で、機械ベルトが車輪の上で頻りに回転している。その発動機は、地下室の茸^{キノコ}のように、そこでひとりで大きくなったように思われる。間もなく自然に回り出し、円筒形天井の地下室を端から端まで、その神秘的な努力の成果で一杯にするだろう。実はそれは、蒸気通風機の伝動装置の一部にすぎない。すぐ近くに機械技士がいるのに気が付く。彼らの使う扉をぬけて、陽の当たる外に出ることができる。

これまでの間ずっと、地球の中心に向かって降りてきたのではない。ほんの丘の麓^{ふもと}、議事堂の土台部分に降りただけである。たしかに町の低い底にある。しかし、依然、大空の下、緑地のなかである。アイルランド人地区の裏窓に、陽射しが眩しく輝いている。壊れた雨戸の上に歪んだ切妻壁が見える。古びて揺れる家々は、いまにも潰れそうである。まるで豚のように不潔な人間に相応

しい、崩れつつある人間の小屋である。生活のしるしはほとんどない。ただ、わずかな洗濯物や窓に見える顔があるばかりである。住人は外出している。しかし、夜には戻ってきて、泥酔してよろよろと粗末な寝台へ向かうのである。

第四章

伝説

場所の特徴は、しばしばそれが連想させるものによって、もっとも的確に表現される。事件はそれが起った場所の周辺の特徴が同質のものである時に、根をおろして伝説に生長する。醜い場所においては特に、醜い行為がいつまでもそれが起った場面の特性となつて、まさに浪漫的な性格を持つようになる。スコットのような人にとっては、さまざまの自然の表情の一つひとつが、それぞれに独自の伝説を用意してくれているように思えたのであろう。それを呼び出すのが、スコットのしたことである。これこれの場所では、これこれの事件だけが、それに適わしい特性を持つて起らねばならなかった。こういう精神に立つて、スコットはベン・ヴェニユー山のために『湖の貴婦人』を、エディンバラのためには『ミッドロージアンを中心』を、北部地方の孤島や荒れ狂う潮の流れのためには、さりげなく書かれてはいるが浪漫的に構想された『海賊』を創り上げた。

普通の人たちにおいても、世代ごとに、スコットと同じように繊細な直観を持つているが、スコットが新しいものを創造したのに対して、古いものに適そくわ

ないものを忘れてしまふところが異なる。もっとも適したもの生き残ることによって、伝説が芸術作品となる。こうして、エディンバラの低い穴ぐらでも、高く聳える屋根裏部屋でも、人々は町に伝わる冒険譚の暗い一節を思い出したり、煖炉を囲んで冬の物語に骨の髄まで震えたりすることがある。その物語は、この場所に備わる自然の特性だけでなく、昔からの生活に特に適した特徴を持つものであつて、恐怖の上に恐怖を加えるのに特に適した物語なのである。外では風が、背の高い「ランド」のまわりで笛を鳴らし、アーチの下通路を吹き抜ける。はるかに広がる荒野のような街灯は、突風の中で震えながらきらめき続けている。

ここでは、銀行の守衛ベグビーが一撃のもとに心臓を刺され、人混みでごつた返すハイ・ストリートから一、二歩入ったところで血まみれになつて倒れていた話が語られる。あちらでは、連統一六人を殺したバークとヘアの話が声をひそめて語られる。解剖用に死体を売り飛ばした男たちで、麻薬に浸り、墓をあばき、犠牲者を膝で扼や殺した。

さらに、ここでは、ブラウディー商工会議所会頭の名声が、いつまでも忘れられないでいる。会頭は、当時のお偉方のひとりであつた。上流の社交界でも一目置かれ、高級家具のとくにその錠前の制作者としての腕は確かで、また、上品な声で聖歌を唄うことができた。多くの市民が、会頭を夕食に招待できることを誇りにしていた。まだ早い時間に会頭が帰られるときは残念に思った。したがつて、もしその客が、どれほど素早く、どのような変装で戻つて来るかを知ったら、狼狽したことであろう。この恐るべきエディンバラの夜盗については、たくさんのお話が語られているが、私がもっとも鮮やかに記憶している話が、その要点を伝えている。

ブロウデューのある友人は、大規模な「ランド」の中のひとつのかなり天国に近いほうに住んでいた。この人は、前々からブロウデューに田舎旅行の計画を話していたが、何らかの事情で引き留められて、その晩も町に居た。この善良な人が、しばらく眠れずに横になっていると、トロン教会の鐘では真夜中をかなり過ぎた二時か三時頃、突然、軋む音がしてドアが開き、薄明かりが入ってきた。そつと寝台を這い出して、別室をのぞく偽窓のところまで這って行った。そこには、携帯角灯カシウの瞬く光の中で、仮面をつけた彼の良き親友、あの会頭がいたのだ。

この小さな物語は、しずかな潮の流れのように広がっていった。いかにもこの町らしく、この町の作法に適っていた。それから、税務署強盗事件、逃走、逮捕に走る警吏、闘鶏の賭け、アムステルダムでの押し入れの中での逮捕、そしてブロウデュー自身が大いに改良した絞首台の落とし戸から宙に足が離れた最期の瞬間で、ウィリアム・ブロウデュー会頭の名譽ある経歴に幕が下されるまで、ずいぶんと時間が過ぎて行つた。しかし今でも、人々の心の眼には、重い二重人格に苦しむ男が、治安判事の晩餐会場から抜け出してこっそり盗人宿に移り、暗い灯りをたよりに小路から小路を下見する姿が浮かぶ。

あるいは、この会頭の話が忘れられている場合でも、疫病の大流行のことは人の心の中に残っている。記憶の中でも今も立ち入るのは危険だと思われる屋敷がある。ペストが流行したとき、厳しい規制が不意に行なわれた。現在「感染を根絶する」と呼ばれる措置が、恐ろしく厳格に続けられた。前と後ろにX形の聖アンデレ十字を付けた灰色のガウンを頭から被って、棒の先に付けた白い布を前にぶら下げた役人たちが、感染者を捕まえに町を巡回すると、神による天罰の恐怖の上に、人間による裁きの恐怖が加わった。

病死者は、ミューア地区に埋葬された。病気を隠していた患者は、女は「採石場の穴」の中で溺死させられ、男は自分の家の玄関先に吊るされ、さらしものにされた。災厄が通り過ぎた後には、破壊された家具と、立ち入り禁止の屋敷だけが残った。

この物語のもっとも恐ろしい部分は、幽霊屋敷のことである。六〇年ぐらい前まで、陰鬱で空虚な屋敷がまだ残っていて、誰もが通り過ぎて近づくまいようにしていた。勇敢な男の子でも、鍵穴に向かって叫ぶと急いで逃げ去るのが精いっぱいだった。屋敷の中には、伝染病が、怪獣バシリスクのごとく横たわって待ち伏せしていて、いつでも流れ出て町中を膿疱と発疹だらけにするこゝとができる、と信じられていたからである。迷信深い市民にとっては、なんと恐ろしい隣家の住人であったことか！ 家の中でネズミが走りまわっただけで、どんなに肝の据わった人でも恐怖で身震いするほどなのに。これは清潔とは言えなかった私たちの祖先が自らの身の不注意について語る衛生にまつわる教訓話だとも言える。

さらに、メイジャー・ウィアの話も残っている。メイジャーの屋敷はもう取り壊されてしまっているけれども、古きエディンバラは、メイジャーの罪深い記憶から逃れることができないからである。メイジャーとその妹は、すこし気難しい信心の香りの中で一緒に暮らしていた。妹は謎のオールド・ミスだったし、メイジャーは稀な祈禱の才能を有していて、熱心な崇拜者の間では「天使のようなトマス」という名前で知られていた。「背の高い黒人で、普段から伏し目がちで、怖い顔つき、大きく平らな鼻をしていた。着ている服は、ずっと袖なしガウンで、色はすこし黒っぽい色だった。そして、いつも、自分の杖を手放したことがなかった。」

この「天使のようなトマス」が、その杖とともに火焙りにされて、妹もおだやかなやり方によってだが吊るされたのは、どうしてだったのだろうか。この二人は激しい宗教的狂信者にすぎなかったのか、それとも、昔の人の肉体に、空想的でも現実的でもある罪を背負っていたのか。ここでは立ち入って考えないことにしよう。

迷信に満ちた都市だからこそ、このような事件が起るのである。それは、黒い熱狂的な宗教が生んだ美しき花であった。少なくともこの出来事は、世間の空想を刺激して、驚くほどの伝説を生み出した。「メイジャーの杖」は、メイジャーの使い走りの役目を果たしたらしい。闇夜には角灯^{ツルク}を掲げて、メイジャーを導くように走りさえた。巨人のような女たちの幽霊が、夜中や朝方、時ならぬ時間に「大きな声で笑ったり、口を開けて薄笑いを浮かべながら」メイジャーの屋敷の近所に出没した。屋敷は、忌まわしさの重みにつぶされ、そこで眠ろうとする人はいなかった。とうとう、都市の改良事業が、その建物を地面と同じ高さにしてしまった。私の父は幼い頃、子供部屋でこんな話を聞かされたという。「夜暗くなると、炎のように赤い眼をした漆黒の馬六頭に牽かれた悪魔の馬車が、しばしばウエスト・ボウ通りの曲がった坂道に轟音を立てて入ってくる。遅く帰ってきた人たちは、馬車の窓越しにメイジャーの死体を見たそうだ。」

別の伝説は、二人の未婚の姉妹について語っている。伝説といっても、そのことを疑わせるような意味でもない。あるいは、それ以下の昨日の作り話にすぎないのかもしれない。しかし、生きつづける力を持っている話であって、エディンバラの事件暦報の中に残るに値するのも知れない。この姉妹は、一つの部屋で暮らしていた。事実から判断して、寝台は二つあったにち

ががなく、いくらかの広さはあったかもしれない。しかし、結局のところ、それは一人部屋であった。ここで、この二人の未婚女性は、言い争いをした。おそらく、神学上の論争であった。しかし、あまりひどく喧嘩したので、二人は、その日からまったくことばを交わさなくなった。

別居すると思われたが、しなかった。お金がなかったからか、あるいはスコットランド人らしく醜聞を恐れたからか、もとのまま一緒に住み続けた。床の上にチョークで線を引き、それぞれ二つの領分に分けた。玄関と炉端も、白線で二分された。その結果、相手の領域を侵さずに、それぞれが部屋に出入りし、自分の料理も作ることができた。そうして、何年もの間、不愉快な沈黙の中で共存した。互いの食事、沐浴、親友の訪問は、冷たい視線にさらされた。夜間、暗闇の見張りをしながら、それぞれ敵方の寝息を聞いていた。部屋の四方の壁も、この姉妹の姉妹らしからぬ争いほど醜い見世物を見たことがなかった。

ここに、油絵の小品としてホーソンの肖像画のキャンヴァスがある。ホーソンは、清教徒の気質をもっていて、そのおかげで、このような清教徒的な恐怖話も扱うことができたのだろう。病気がちで、同じように信心に打ちこむ姉妹が、大きな聖書のページをめくり、心底から悔悟の祈りを捧げる姿が描かれている。

姉妹は、襷^{ひだり}のついたペティコートを着て、嵐の晩にそれぞれの炉辺で祈っているかと思うと、それぞれの窓辺に腰掛け、はるか下の湾に向けてなだらかに傾斜していく夏の景色や、かつては一緒に手をつないで歩きまわった野原の小道を見下ろしている。歳を重ね体の衰えがひどくなると、身支度にも時間がかかるようになり、手が震え出し、知らずに居眠りするようになる。それでも、

長年の対立は、ますます堅固さを増すばかりだった。ある晴れた日、ついに、何気ないひとことが、眼差しが、挨拶が、それとも死の予感が、二人の心を溶かして、チヨークの国境が踏み越えられる日が来たのだろうか。

悲しいかな！ 人類の教会史——人間の年代記の中で、もつとも歪<ゆが>んでいて憂鬱なもの——を知る者にとつては、この話は、スコットランドと、フォース湾を見下ろす高みに位置するこの首都に特有の多くのものの象徴であるにすぎない、と思える。この象徴は、恐ろしく現実的なので、よそから来た人には、諷刺画のように受け取られるだろう。北部のこの地に住む私たちは、気の済むまで驚くほど辛抱よく憎む性質<たち>なのだ。

この手記の最初で、国教会と非国教派教会の二つの教派会議について、また、ハイ・ストリートを挟んで両派がお互いの聖歌や讃美歌の合唱を聞くことができる様子について触れた。両者の間に空間として存在するのは通りひとつにすぎないが、両者の間に原則論として存在するのは亡霊の影である。しかも、人々は、魅せられたようにそこに座って、お互いに、相手に神の恩寵が多くありますようにと、ののしるような口調で祈りを捧げている。

せいぜい二つの教派しかないなら、それでもいいだろう。しかし、スコットランドの宗派は、あの姉妹のような大家族を形成している。チヨークの線は太く引かれ、多くの一般家庭の真ん中を貫いている。エディンバラは、あたかも巡礼地であるかのように教会の多い都市である。ウェスト・ポウ通りの天辺から石を投げて届く範囲にも、四つの教会がある。ある教会は入口まで信者であふれ、ある教会は記念碑のように人影がない。それでも、新しい教会がさらに建築中である。それゆえ、驚くほどに教会の鐘の音がやかましい。安息日には、トリニティ地区や海辺の周辺から、丘陵に接するモーニングサイド地区へ

かけて、突然鳴り始める。

金色に輝くある秋の朝、オックスフォードの鐘の音が調和して交響楽のような協和音を奏でるのを聴いたことがある。それは、聴いて美しく素晴らしいものだった。それに対してエディンバラでは、あらゆる種類の大音響の鐘の音は、重なり合つて、いやもつと正確には、離ればなれになって、しだいに大きくなったり小さくなったりしながら、ひどい雑音の一塊となる。一つの鐘が別の鐘に追いつくとすぐ、遅れて置き去りにされる。五つか六つの鐘がすべて、正確に同じ一瞬に合わさって、傷ついた鼓膜を襲つてくるとすぐ、陰鬱な不協和音となる。そして、一瞬の間、すべての鐘が謀ったように沈黙を守る。実際、この世でエディンバラの安息日の鐘の騒音ほど陰鬱な音は稀である。教会からの厳しく耳ざわりな警鐘である。調和することのない正教同士の叫び声が、それぞれの集会の会衆に向かって、それぞれの集会所で、極右の過激行為と左派の背徳行為²に対して抗議の声を上げるように呼びかけている。

確かなことは、このような極端な熱狂ほど悪い極端はほかにないし、このようなキリスト教徒の愛に対する裏切りほど嘆かわしき背徳もない。シェイクスピアは、『から騒ぎ』という喜劇を書いている。スコットランド民族は、同じ主題で幻影の伝説を創り上げた。たくさん鐘が、安息日の朝、かならずフォース湾の上の丘陵で鳴らされるのは、この驚くべき作品を成功させるためである。もし宗教については同じ考えをもつ人たちが、謙虚に一つの屋根の下で神に祈るならば、いったい幾つの尖塔の鐘が静かに停止して、いったい幾つのそうした醜い教会が取り壊され、有用な建築資材に再利用されることだろう！ しかし、チヨークで描いた線がある。どちらが自尊心を抑えて、先に終わらせるのだろうか？

第五章

グレイフライヤーズ教会

グレイフライヤーズ教会の庭を一般の人たちに開放したのは、メアリ女王である。当時は、新しい半田園風の墓地であつた。もつとも、今はほかの幾つかの墓地に取って代られて、遺物にすぎなくなっている。昔はフランシスコ会修道士たちが、夏の晩には楽しい時を過ごしたに違いない。この庭は、エディンバラ城の台座となつてゐる岩壁のもつとも高い部分が正面に聳えてゐる願つてもない位置にあるからである。現在でも、故郷エディンバラの見晴らしの良い場所の一つとして知られてゐる。

よそから来た人たちは、ここへ案内されると、この新たな証拠によつて、何とも不思議な形でこの都市が丘の上に広がつてゐるのを見ることになる。教会の敷地は変わった形をしていて、新旧二重のグレイフライヤーズ教会の建物が、敷地の頂の高さに水平に建つてゐる。数株のサンザシの茂みが所々に点在してゐる地面は、北に向かつて急斜面となり階段状に下がつていく。開けた場所には、板石の墓碑と長方形の墓石がたくさん並んで見える。ここは、敷地の周りすべてが、ぞつとするような装飾で飾られた貴族の霊廟で囲まれてゐる。

思うに、墓地芸術であるバリのルビヤック納骨堂は別にしても、死をおどろおどろしく描写することにかけては、私たちスコットランド人の右に出る者はない。私たちは、時間とその偉大な移ろいの象徴そのものを愛してやまないように見える。田舎の教会の周りにも、^{どくろ}髑髏と交叉した大腿骨、鼻のない天使像と最後の審判の日を告げて鳴り響くラッパの^{デザイン}意匠など、素晴らしい陳列品が見

られる。石工はみな、散文的なホルバインであつた。死を深く意識して、教会の庭を歩く人たちの前に、死の恐怖を、簡潔に、含みを持たせて置いてみせることを好んだ。石工は、人の死の運命を素朴に暗示するアイデアに溢れていて、どんな農夫の死でも、逃さず主題にした。グレイフライヤーズ教会にあるのは、このような芸術の古典的実例の数々である。その当時は、疑いなく高価な記念碑であつたし、同時代の人たちには、とても優美で均整のとれたものと映つたにちがいない。優美さが曖昧となつた今は、その意味だけが残つてゐる。

もしかしたら、恐怖を象徴するおびたしいラテン語の墓碑銘——あるいは、柱の軸のまわりを上端に向かつて這いあがつていく文字、あるいは、天使のラッパから渦巻き模様に出ていく文字——や、墓穴に立つてゐる頭のない彫像や、私たちの父祖が氣に入つてゐた、亡くなつた人に対する悲しみとこの世の無常観を物語る伝統の技のすべてを、今は、笑つて眺めることができる。しかし、それは心の奥底からの笑いではない。装飾の一つひとつは、とても陽気な石工の見習いが口笛を吹きながら木槌を振るつて制作したものかも知れない。けれども、その一つひとつの元の意味は、真面目なものである。そして、この静寂に包まれた敷地にある同じように多くの装飾群の相乗的な効果は、憂鬱なまでに深刻である。

敷地の周囲には、下層階級の人たちの家が建ち並んでいて、教会の庭に背を向けてゐる。ほんの数インチの距離が、生者と死者を分けてゐる。こちらでは、家の窓が墓の切妻壁ですっかりふさがれてしまつてゐる。あちらでは、通りが墓地の高さよりもはるかに低く落ち込んでゐる所があつて、一本の煙突が墓碑の背を這うように立ち上がつてゐる。背後から、赤い通風管が品なく覗い

ている。墓地の湿った臭いは、労働者が夕餉を囲む家の中まで入り込む。こじんまりした家庭生活の営みが、窓辺に垣間見える。町の喧騒から離れたところにあるこの敷地の孤独や静寂そのものが、その違いを一層際立たせる役を果たしている。

墓地を歩いていくと、子供たちがパン屑を撒いて雀に餌をやっている。人々の歌声、皿洗いの音、涙声と折檻の音が聞こえてくる。物干しのリネン類が、死者のための彫刻の背後ではたみえている。もしかしたら、猫が窓の上の楣石まぐさから壺形の墓碑の上へとすべり降りてくるかも知れない。ほかには何も動くものがないので、こうした不釣り合いの光景と騒音は、人の注意を攔んで離さず、この場所の悲しみを強めている。

グレイフライヤーズ教会は、絶えず猫たちに占領されている。ある昼下がり、一三匹もの猫が、王室建築家であった老ミルンの墓のそばの草地で休んでいるのを見た。みな毛並みに艶があつて、丸く太っている。まるで食べ慣れない肉を餌にしたあとのように、満足げに目を瞬しばたかせている。老ミルンは、自分の墓のまわりに居る仲間たちのことはほとんど気にも留めず、私たちの望み通り、聖人さまたちと聖歌を詠唱していた。しかし、その奇妙な光景にはおぞましい一面があつたことを告白しておこう。さらに歩みを進めて、エディンバラ城、旧市街の屋並み、そして舞踏会ホールの尖塔が、空を背景にして、無色の版本のような精確さで配置されている方を見上げて、ほっとする。教会の庭からは、広々とした眺望が望まれる。空を見上げて、この世の美を目にすると、病的な考えから心が救い出される。

ある日の訪問は、けっして忘れることが出来ない。どんよりした小雨まじりの日だった。草地は、雨に濡れていた。天気が雨模様から晴れに変わり、また

元に戻るたびに、シャツや下着を外に干しかけていた家々の人たちは、怒ったようにまた取り込んでいた。墓掘り職人と、その知り合いの田舎出の庭師が、私に付き添ってくれて、小さな中庭の付いた墓の一つひとつに入ってみた。昔の金持ちには、自分の先祖の骨を、隣から隔離して納めることで満足していた。

ある墓では、ちょっとした小さな聖堂の下に、見捨てられた人形を見つけただ。その人の長靴下のうね模様の細部にいたるまで非常に写實的に制作されている。手には、命日の日付が彫られた贖宥札を握っている。一人ぼっちで貴族的な区域に閉じ込められていた人形の顔は、悪ガキか、新たな神の摂理のもとで忘れ去られてしまった下等神のように、とても哀れな滑稽な表情をしている。毬いガゴボウがその足元に生え、雨滴がまわりに滴り落ちている。世間は、その人が誰で、どこへ行ってしまったのかについて、申し分のない完全な無関心を維持している。

また別の墓では、円筒形天井の納骨堂があつて、外見は堂々として立派だけれど、内部は湿気とクモの巣でおぞましい限りである。黒い盛り土が三つあつて、大腿骨が一本露出している。ここは、その庭師が長い間仕えてきた一族の埋葬地であるらしかった。庭師は、古くからの知り合いの一人である。「こりゃー、ミス・マージェットさまのものじゃ」と言つて、骨に優しくひと蹴りを加えた。「このオールド・××！」

私は、墓地でいつも、居心地が悪い感覚を覚える。これほどたくさんの墓を目にすると、忘れ去ることが最善の記憶も、永続化されてしまう。けれども、それまで、この日はど強い印象をもったことはなかった。ある場合には嘲笑の的となつて、そして、ある場合には侮辱的なあだ名を付けられて、憂鬱な気分になる。人はどちらの場合にも、かなりの代償を支払ってきた。大部分の人に

とって妥当な墓碑銘は、『明日は汝の番なり』(*cruis tibi*)という冷笑的なからかいの言葉である、と私は考え始めていた。それは、どちらかと言えば、むしろあら捜しをする側の口を塞ぐであろう。なぜなら、最悪の死を認めると同時に、意気揚々と攻勢にも転じているからである。

グレイフライヤーズ教会は、いろいろな連想をさそう場所である。今は取り壊されてしまったが、建物の下部の隅にひとつ窓があった。そこが興味深い伝説の場所であることを教えてくれたのは、あの墓掘り職人である。一人五シリングで多くの殺人を犯すことになる悪名高き死体盗掘人バークが、パイプと温めた酒を手にながら、よくその窓辺に座って、葬列が墓地へと行進するのを見つめていたという。また、同じ情報源によれば、敷地の上方にある墓のひとつは、当時まだ完成したてであったに違いないけれども、宗教改革の混乱のとき、ジョン・ノックスが一時隠れていた場所である。教会の裏手には、サー・ジョージ・マケンジーの呪われた墓所がある。信仰誓約をめぐる騒動のとき、『残忍マケンジー』として名をはせた検事総長だが、信教の自由と寛容について世論を喜ばせるいくつかの論説の著者でもある。

一八世紀には、ヘリオット慈善学校から逃げ出したひとりの年長生が、警察の搜索を逃れ、ここでいったん身を隠していた。この学校は、グレイフライヤーズ教会のすぐ西隣にある。芝生の中にある優雅な建物で、創立記念日には、たくさんの子供たちが『クワの茂み廻り』という身ぶりの遊戯や『輪になってキス』というハンケチ落としに似た遊びに夢中になっている。だから、逃亡者がその墓所に潜伏することに成功すると、級友たちは、年長生に食べ物を運ぶ機会はいくらでもあった。年長生は、外国に密航できる船が見つかるまでの間、安心してそこで横になっていた。それにしても、昼も夜も一日中、検

事総長の死体と一緒に、ひとりで横になっていたとは、ほんとうに図太い鉄の心臓であったに違いない。その勇氣と張り合える少年は、とてもほかには居ない。

人の魂が確実に地獄に落ちたとき、その亡骸は、どんなに高価な墓の中でも、ほとんどじっとしていることがないという。いつかそのうちに墓の扉が開いて、神に見放されし者は、嫌悪感を催すしかない姿で墓から立ち現れる。検事総長の霊廟の扉を叩いて、出て来いと挑むことでも、とても勇敢な行為であるとみなされていた。「残忍マケンジー、××あつたら出て来い！」向こう見ずな男の子たちが囁し立てる。しかし、当のサー・ジョージは、他のことでも手一杯のようである。信教の自由と寛容についての論説の著者は、安らかに眠り続けている。不寛容にも、彼自身が手を貸して虐殺した多くの人たちの間で。

墓碑銘の一つとなっている言葉にしたがえば、『不適當な墓所』(*infelix campus*)と呼ばれることになるこの墓地は、(その碑銘はジョンソン博士が批評家の目で見たもののだが)マケンジーによって迫害された人たちの思い出に捧げられている。熱心な人たちによって信仰誓約書が署名されたのは、まさにここにある平らな墓石の上においてであった。ローリントン地区にまで伸びている教会の庭の細長い場所では、ボズウェル・ブリッジ監獄の信仰の罪人たちが、パンと水だけの食事を摂り、殺人には殺人で報いるがごとく、用心深い狙撃手たちに監視されていた人たちが、絞首台行きか、あるいは植民地農園での奴隷労働かを予想する五ヵ月間を過ごした。そして、グラスマーケット広場で、立派な仕事が行進している間、グレイフライヤーズ教会をぶらついている人たちは、殉教者の語りかける声をかき消す軍楽隊の太鼓の響きを耳にしたかも知れない。

そればかりか、サー・ジョージの墓からもっとも遠く離れた低い一角には、その闘争の中で命を落としたすべての人たちのために献じられた、素朴な信仰誓約の韻文の書かれた記念碑が建てられている。たしかに、指導者のアイアングレーやコモネルの傍らには、吹雪の中で撃ち殺されたムーア人の男はいないし、オークニー諸島沖で溺れた二〇〇人の中の誰ひとりいない。まして、信仰誓約をしたために、アメリカの農園で酷使されて極貧の中で斃れた奴隷などいるはずもない。しかし、誰もが、この記念碑の持ち分を請求できるのである。

そして、もしそのようなことを黄泉の国の住人たちの間で義士たちがしたいと思えば、ユリウス・カエサルやファラオと同様にこの世に自分の記念碑がある、と自慢することもできる。彼らが皆どこに埋葬されているかは分らない。

実際、骨は広い範囲に散らばっている！しかし、彼らのうちのいく人か、あるいは、彼らのうちのいく人か的一部分が、どのようにして長い道の手を経てこのような立派な聖墓にたどり着いたのかを知りたい読者がいれば、生存中には彼らの同志であり、死後はその弁明者となったある人物のことばに耳を傾けてもらおう。若干の枝葉末節、それに馬鹿げた争いのある問題は省略したけれども、あとはパトリック・ウォーカーその人の言葉と綴り字のままである。――

ジエームズ・レニック氏が私に語ったけっして忘れることのできないことがある。リースとエディンバラの中間にあるガロリーで公開処刑を目撃したと。そのとき、絞首刑の執行人が、パトリック・フォアマンの右手と一緒に、その五人の頭部を潰して切り落すのを見た。胴体は、すべて絞首台の足元に埋められたが、頭部は、パトリックの右手と一緒に、エディンバラのプレザンス門まで運ばれて、五つの槍先にのせて曝さられた……。さらに、レニック氏が語るには、友人たちを集め、惨殺された胴体を掘り起こさせ、エディンバラの

(このときは、グレイフライヤーズ教会ではなく)西部教会の庭まで運んで行ってそこに埋葬したのは、その手が為した最初の公然たる行動であった。そのあと、友人たちは、町はずれまで来て……その五つの頭部と手を降ろした。夜が明けると、急いでプレザンス「市壁」沿いに北上して、町のサウス・サイド地区にあるローリストウン庭園に着いたとき、すでにあたりはともも明るくなっていたので、敢えて計画していた通りに胴体と一緒に頭部を埋めに行く危険は冒さなかった。仲間の一人でも見つければ、たちまち死刑が待っていたからである。友人であり、その中の一人であったアレグザンダー・ツイーディーが、その当時この庭園の庭師をしていたが、頭部と手を(リネンで包み)箱に入れて、ここで埋葬することに決めた。一六八一年一月一日に処刑されて、その後(正確には三日欠けるが)四十五年間、そこで眠っていた。それが見つかったのは一七二六年一月七日のことである。敷地のその部分は、何年もの間、手が加えられていなかった。庭師が掘り返してみたところ、頭蓋骨が出てきて驚愕した。箱は朽ちて消えていたのである。この庭園の所有者であるシヨー氏は、掘り起こさせて、^{あずまや}亭の卓台の上に安置した。シヨー氏の母親は、とても親切な人であったので、リネンの布地を切って、覆いを作った。頭部は、そこで十二日間安置されていたが、たくさんの人が観に訪れた。件の庭師アレグザンダー・ツイーディーが言った。「死ぬときは、自分の墓に宝物を隠すというけれど、金でも銀でもないな。」その息子であるダニエル・ツイーディーが、私と共にその庭園を訪れたとき、語ってくれた。父は、それが埋められていた上に白バラの木を、庭園のずっと反対側には赤バラの木を植えていましたが、庭のどの木よりもよく実をつけていました……と。多くの人が(頭部を観に)好奇心に駆られてやって来た。それでも、これほど多くの関心をもつ

た真面目な男女が、わが殉教者の遺骨に好意を寄せてくれるのを見ると、やはり喜びに堪えない。仲間六人で相談して、それを一七二六年十月一九日に埋葬することに決めた。そして、仲間の皆が、友人たちにその日取りと時間を知らせることにした。水曜日——彼らの大部分が処刑された曜日である。夜明け前の四時——彼らの大部分が自分たちの眠る墓にたどり着いた時間である。彼らのために、完全な大きさの黒い棺を作らせ、一緒に四ヤードの上質リネンを準備させた。わが殉教者団が埋葬されるときやり方である。したがって、その日取りと時間は守られた。リネンは二つ折りにして、その半分を彼らの下に敷いた。下顎は頭部から離れていたが、若かったので、齒は付いて残っていた。すべての人が、彼らのどの頭部にもある穴を目撃している。絞首刑の執行人が、金槌で開けた穴である。その頭蓋骨の大きさを頼りに、顎をそれぞれに添えた。その上からリネンの残り半分を被せ、棺には鉋くずをいっぱい詰めた。革命のときに行なわれたように、エディンバラの町の主要箇所を行進するように強く勧める人もいたが、それは拒否した。そのように彼らを見世物にすることは、空疎で浅はかなことに見える。それに、これほど人の心を動かし、驚かせ、これまで聞いたこともない、堅く真面目な神の掟への堅信を思うと、とうてい調和しなかったからである。その場所から、ほかの葬儀と同じ通常の道筋を選んだ。すなわち、市の壁の裏手を東に向い、プリストウ門入って、カウゲート通りの先端へ向かい、それから曲がって、グレイフライヤーズ教会の墓地へ向かった。そこで、私がいままで実際に会ったことのある老若男女、聖職者その他、大勢の人たちとともに、殉教者の墓近くに埋葬されたのである。

こうして、漸く殉教者たちは、自分たちの眠る墓に入った。たとえ大きな思い違いであつても、自分の義務を果たすかぎり、人は模範的な人生を送っているのだ。そして、殉教者の記念碑の隣で眠ることができてもできなくても、神の意思で、必ずどこかに安息の地を見つけることができる。死を見下していた英雄を想い、心を和らげないかぎり、死について考えることは好ましいことではない。その理由は、あまり重要ではない。ただ、それが地球の反対側で信仰のために火焙りの刑に処せられた司教であつても、その想い出は心を軽くしてくれて、気持ちを乱されることなく墓の間を歩き廻ることができる。だから、殉教者の記念碑は、死者の地にあつても、健全で、元気づけてくれる場所である。記念碑を眺めていると、自らの義務から解放された人たち、パトリック・ウォーカーの別のことを借りれば、きつぱりと舞台を離れた人たちの世界から、素晴らしい魂の力が湧いてくる。

「次号に続く」

訳註

第一章

・女王の愛人 メアリ女王 (Mary Stuart 1542-1587 在位1542-1567) が寵愛したとされるイタリア人秘書官デイヴィッド・リッチョ (David Rizzio)。リッチョの影響下でメアリがカトリック寄りになったことに不満を抱いた貴族ウィリアム・リヴァン (William Ruthven) およびジェイムズ・モートン (James Morton) らにより、一五六六年ホーリールード宮殿の女王控の間で暗殺された。女王の夫ダーンリ卿も関与したと言われる。翌年、天然痘にかかったダーンリ卿は、エディンバラ市の壁の外にある館でメアリの新たな愛人ボスウェル伯により爆殺された。その後、結局、メアリは退位させられてイングラントに逃亡したが、エリザベス女王の下で一九年間監禁されたのち、一五八六年処刑された。現在、ホーリールード宮殿内のその控の間が、見学者に公開されている。

・チャーリー王子 (ボニー・プリンス・チャーリー Bonnie Prince Charlie 麗王子チャーリー) スコットランドおよびイングランドにおけるステュアート王家復興を目指す一七四五年のジャコバイト反乱における若くハンサムで勇敢な象徴的人物。一七四五年、亡命先からアウター・ヘブリディーズ諸島に上陸、スコットランドを制圧し、城を除くエディンバラ市全体を占拠した。ここで、フランス亡命中の彼の父ジェイムズ・エドワード・ステュアートに代わって、父を国王と宣言したのである。一時ダービーまで南進したが、結局、翌年インヴァネス郊外のカロドン・ムアでの戦いで敗北して、フランスに脱出した。

・「ヘルモンにおく露のように」聖書・詩編第一二三章の中のことば。「見よ、

兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。／かぐわしい油が頭に注がれ、ひげに滴り衣の襟に垂れるアロンのひげに滴り／ヘルモンにおく露のようにシオンの山々に滴り落ちる。／シオンで、主は布告された／祝福と、とこしえの命を。」(『聖書 新共同訳』一九八七年による)

・クレイヴァーハウス家のグレアム (Grahame of Claverhouse) ダンディー子爵、ボニー・ダンディー・ジョン・ダンディー (John Dundee)。ロバート三世の子孫、モントローズ伯の親族。一六八八年イングランドの名誉革命のとき、スコットランドでも貴族や長老派の議会は、ジェイムズ七世を廃して、主教制度の廃止を条件に王権をオレンジ公ウィリアムに託した。グレアムは、ジェイムズ国王を支持して政府軍に対して反乱を起こし、ハイランドでジェイムズ派の氏族と結んで軍隊を招集した。反乱軍は、キルクランキ峠での戦いで勝利したが、グレアムは戦死した。その後、反乱は消滅する。麗しのダンディー (ボニー・ダンディー Bonnie Dundee) という尊称は、ウォルター・スコットにより名付けられたもの。

・エイケンヘッド (Thomas Aikenhead 1676-1697) 当時エディンバラ大学の医学学生であったが、一六九七年神を冒瀆した罪で死刑となった。ブリテン全体を通じて、この罪状で死刑が科された最後の事件。彼は、大学図書館に収められていたデカルト、スピノザ、ホッブズ、それに無神論のトーランドやセルヴェトゥスの著書について、大学の友人たちとの議論を好んだ。その友人のひとりマンゴウ・クレイグ (Mungo Craig) からの密告をきっかけとして、一六九六年、反冒瀆法 (一六六一／一六九五年) 違反の容疑で逮捕・起訴された。起訴状にある主な理由は、一年以上にわたり神、キリスト、聖書、キリスト教神学すべてに対して冒瀆的な発言を繰り返してきたことであっ

た。——「神学は、でつち上げられた悪意に満ちた戯言の狂想詩」であり「詩的な虚構と奇怪な空想」からなり、旧約聖書は、「エズラによるおとぎ噺」であり、新約聖書は、「エジプトで魔術を学び数人の漁夫を拾い上げたペテン師の物語」である。また、三位一体説は、「誰も反駁する価値すらない」ことであつて、神のキリストへの受肉は矛盾だとあざけり、天地創造を否定し、自分が無神論者であることを告白したとされる。——檢察側証人として五人の大学の友人がこれらのことにつき証言した。弁護人は付いていたが、その弁論内容についての記録は残っていない。スコットランド高等刑事裁判所は、一六九六年のクリスマス・イヴに死刑判決を下した。初犯であり、かつて孤児であつた生い立ちの不遇とまだ若年であることを理由に枢密院に減刑の請願がなされた。二人の大臣と二人の枢密顧問官はこれを支持したが、執行延期は、スコットランド教会の承認が条件とされた。教会総会は、不敬と不信心の蔓延を恐れて死刑の執行を求めたため、刑は翌年一月八日執行された。エイケンヘッドは聖書を手に持たされていたという。トマス・マコーリーは、「この牧師たちこそ、憐れな少年の殺人者であり、絞首台の周りに集まつて、エイケンヘッドが口にしたよりもひどい祈りのことを吐いて、神を侮辱した」と述べて、この事件をスコットランド教会の専制的権力を証明するものであるとした。その是非はともあれ、友情よりも信仰が優先する最後の時代であつた。

第二章

・スターリングの町 エディンバラの西北西にあるフォース湾のもつとも奥にある城下町。以前はここがスコットランドの首都であつた。中世からの壮大

なスターリング城があり、岩の断崖の上に立つその城の姿は、エディンバラ城によく似ている。

・ファイフ地方 フォース湾の北岸に広がる肥沃な平原地帯。古くは、ピクト人の王国が栄えていた。沿岸地方は良港も多く、オランダなどの貿易も盛んであつた。港町セント・アンドルーズは、最古のゴルフ場、および大学があつて、日本でもよく知られている。

・ピスガの山 イスラエルの死海の北東部にある山。山頂部は聖書ゆかりのネボ山。モーゼがこの頂から約束の地カナーンを望んだと言われる。望んでも手に入れないことの譬え。

第三章

・治安判事 (justice of the peace) その起源は、一二世紀、イングランド王リチャード一世が、反乱の絶えない地方に騎士を置いて治安の維持に当たらせたことに由来する。現在、スコットランド以外では、magistrate という名称で呼ばれ、陪審裁判に付されない略式起訴犯罪のみを扱う法律家の下級司法裁判官である (スコットランドで sheriff とよばれる裁判官は、これと同じ権限を有する法律専門家の裁判官である)。都市部を除き、その多くは一般市民が無給で任命される。かつては、地域の名望家が国王から任命されて「王の平和」を守る広範な役割を担っていた。裁判だけでなく、その地方の労賃、食糧配給、道路や橋などの建設と維持、救貧院などの福祉事業など、政治的・行政的権限を果たしていた。一九世紀に選挙で選ばれる州評議会制が導入されると、その権限は限定的な裁判権に制限された。

・ランド (lands) の家並みの中に開けられた大きな丸窓 一八五〇年以來

使われている光学装置「カメラ・オブスキュラ」(Camera Obscura)のこと。城から下ったカースル・ヒル(ハイ・ストリート)にある。

・詩人トーマス (Thomas the Rhymer) 一二世紀に実在したスコットランドの領主・予言詩人 Thomas Learmonth of Erceadoun の死後、作られたバラッド『詩人トーマス』の物語のこと。『浦島太郎』にどこか似た、さまざまな形の話が物語詩 (ballad) の形で伝承されている。たとえば、妖精の国の女王にキスされた正直者トーマスは、妖精の国のお城に連れて行かれて得意のハープを演奏した。許しを得て地上に戻ってみると、すでに七年が経っていた。数年後トーマスはまた妖精の国へ戻って行ったとさ。など。

・現在の議事堂 (Parliament House) スティーヴンソンの時代は、すでにイングラントと合同してスコットランド議会はなく、高等法院(高等刑事裁判所)として使用されていた。一九九八年スコットランド法のもとで復活した現在のスコットランド議会の近代的建物は、ホーリールード宮殿の前にある。

・ジョン・ノックス (John Knox, 1510-1572) 一六世紀スコットランド宗教改革運動の指導者。ハイ・ストリートに残されている一五世紀の建物は、「ジョン・ノックスの家」と言われて、観光名所となっている。

・チャールズ二世 (Charles II, 1630-1685; 在位1660-85) 一六四九年のピューリタン革命で処刑されたチャールズ一世の息子。父の死後スコットランド王となり(一六五一年戴冠)ウースターで戦ったが敗れ、大陸に亡命した。クロムウェルの死後、王政復古で一六六〇年イングラント王位についた。陽気で快楽的な君主として一般には知られていたが、心情的にはカトリックであった。非国教徒の信仰の自由を認める寛容令(一六七二年)を出したりして、

国教会派のイングラント議会とは死ぬまで対立が絶えなかった。

・スコットランド合同 (Union) 一六〇三年ジェームズ六世(イングラントではジェームズ一世)以来長くイングラントと同君連合を形成して、王はロンドンに移りエディンバラには国王代理が置かれたが、別々の王国であった。一六八八年名譽革命でカトリックのジェームズ七世(ジェームズ二世)が追放された後の混乱の中で、両国は対立を深めていった。一七〇七年、イングラントから国境の自由通過と貿易を禁止する法律によって圧力をかけられたスコットランド議会は、自ら合同法 (Act of Union) を通し、解散せざるを得なかった。これにより、グレート・ブリテン王国が成立する。

・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) エディンバラ生まれの詩人・小説家。やはり大学で法律を学び、詩人、そしてちに小説家に転じた。歴史小説の大家として知られる。ステイーヴンソンが目標とした作家のひとりである。現在、スコットランドの紙幣には、スコットの肖像が印刷されている。

・『ウェイヴァリー小説』(Waverley novels) 詩人を自負していたスコットが、経済的に苦しくなったとき匿名で書き始めた『ウェイヴァリー』(Waverley, 1814)、『ロブ・ロイ』(Rob Roy, 1818)、『アイヴァンホー』(Ivanhoe, 1819) その他のスコットランド・イングラント歴史小説群のこと。『ウェイヴァリー』は、一七四五年のジェームズ国王派 (Jacobite) の最後の反乱に題材をとり、反乱に同情し事件に巻き込まれていくイングラントのエドワード・ウェイヴァリーを主人公とする物語。

第四章

・『湖の貴婦人』(*The Lady of the Lake*, 1810) アーサー王伝説をもとに、スコットランド中部トロサックスにあるカトリック湖を舞台とした叙事詩集。ロッシーニのオペラ「湖上の美人」(*La Donna del Lago*)の題材にもなり、のちに「アヴェ・マリア」に編曲されたシューベルトの歌曲「エレンの歌」、第三「(*Ellens Gesang III*)」も、スコットのこの詩の独訳が用いられている。

・『ミッドロージアン地方の中心』(*The Heart of Midlothian*, 1818)『家主物語、第二篇』(*Tales of My Landlord, 2nd series*)というシリーズで出版されたスコットの小説のひとつ。身分は低い、敬虔で厳格な長老派クリスチャンの家庭に育った女性ジーニーが、妹の嬰兒殺しの冤罪を晴らすため、徒歩でロンドンまで行き、スコットランドの有力貴族アーガイル公の力添えで女王に拝謁を求めて…という物語。なお、この「ミッドロージアンの中心」というタイトルは、この小説の最初の部分で取り上げられている一七三六年エディンバラで実際に起こったポータス暴動(*Porteous Riots*)という民衆暴動の舞台となったトールブース監獄に因んでいる。監獄の跡地には、今もハート形の敷石が残されている。

・『海賊』(*The Pirate*, 1822)やはりスコットのウエイヴァリー小説の一つ。主人公のクリーヴランド船長は、一八世紀初めに実在したオークニー諸島生まれの船乗りで反乱を起こし海賊となったジョン・ガウ(*John Gow*, c.1698-1725)の生涯をもとに創作された。ちなみに、デフォー(*Daniel Defoe*, 1660-1731)の『ロビンソン・クルソー』(一七一九年)は、別の海賊アレクザンダー・セルカーク(*Alexander Selkirk*)の話をもとにしているが、デフォーは、ガウについても書いている。

・バークとヘア(*William Burke, 1792-1829, and William Hare*) 一九世紀前半のエディンバラの連続殺人犯の二人組。ともにアイルランドからの移民労働者だった。一八二八年、ヘアが管理していた木賃宿にバークが住んでいて、たまたま最初は家賃を溜めたまま病死した間借り人の死体を二人で盗掘してエディンバラ医科大学の解剖教室のロバート・ノックス教授に七ポンドで売ったことがきっかけとなった。二人の愛人たちも手を貸して、ほかの間借り人や娼婦や浮浪者など手当たりしだいに酒を飲ましては絞殺して、ノックスに売り飛ばした。犠牲者は、少年か体が弱い男性四人、娼婦や浮浪者の女性一人、性別不明一人で合計一六人。起訴する証拠は不十分だったが、検察はヘアと司法取引をして免罪する代わりに、バークを起訴するための証人とした。バークのみ一八二八年二月に死刑判決を受け、翌年一月二八日、城から下つてすぐのローンマーケット(*ハイ・ストリート*)で処刑された。バークの遺体は、処刑後、医科大学の解剖教室に送られた。釈放されたヘアは、ロンドンへ逃れたが、石灰の穴に投げ入れられてリンチを受けて失明。浮浪者としてカーライルで死んだという。その愛人たちは、起訴されたが有罪でも無罪でもない「証拠不十分」(*not proven*)というスコットランド特有の陪審評決を受けて、それぞれオーストラリアとアイルランドへ行つたと噂されたが定かではない。ノックス教授は起訴されず、非難の嵐のなかロンドンへ去った(一八六二年死亡)。死体を傷めないこの殺害方法は、「*bunking*」と呼ばれた。

・ブロウディー商工会議所会頭(*William Brodie, 1741-1788*) 家具職人、商工会議所会頭、エディンバラ市評議員。エディンバラの名望家。スリルと闘鶏ギャンブルに使うお金のために夜盗を働いたとされる。かつて自分が工夫し

た絞首台で最期を遂げた。ステイーヴンソンの小説『ジギル博士とハイド氏』の主人公の実在のモデル。

・トロン教会 セント・ジャイルズ教会の東隣り、ロイヤル・マイル（ハイ・ストリート）沿いに一七世紀半ばに新たに建てられたエディンバラ市南東監督区の長老派教会。ゴシック様式とパラディオ様式との折衷スタイルの建物で、上部に鐘楼があった。

第五章

・グレイフライヤーズ教会 (Greyfriars Kirk) エディンバラの旧市街にあるスコットランド長老派教会の教区教会。建物自体は、一七世紀初め頃のもので、名前の由来は、一五六〇年のスコットランド宗教改革以前のフランススコ派修道会に由来する。ステイーヴンソンの当時は、まだ教会堂の内陣が壁で二つに仕切られていて、長老派の別々の教団が礼拝を行っていたので、新旧二重の教会と呼ばれた。亡くなった警察官の飼い主の墓をここで守っていたスコットランドの忠犬ハチ公・テリア犬「グレイフライヤーズ・ボビー」は有名。古くはデイズニー映画、近年、再映画化されて、その銅像が入口の門のところであり、観光客の呼び物となっている。しかし、当のスコットランド人にはあまり知られていない。むしろ、本文に出てきたように、一六三八年この教会で信仰誓約が署名されたこと、および一六七九年千人以上の信仰誓約派の人たちが、未決のままこの教会の裏庭に押し込められて、裁きを待っていたことは、歴史の授業で習って皆知っている。

・王室建築家である老ミルン (John Milne) 石工の棟梁。王室建築家。トロン教会を設計したことで知られる。

・サー・ジョージ・マッケンジー (Sir George Mackenzie, 1636-1691) 一七世紀のスコットランドの法律家・検事総長。神との直接の繋がりを主張する信仰誓約派の人々を弾圧した悪名高き鬼検事として知られている。『現代法曹の弁論法の観念』（二六八一年）、『スコットランド法提要』（一六八四年）などの法律専門書のほか、『若干の道徳的 주제に関する論説』（一七一三年）というようなエッセイも書いている。やはり前記のグレイフライヤーズ教会に埋葬されているが、エディンバラのポルターガイスト伝説によれば、今でも、地獄に落ちたその魂は安らかに眠ることができず、マッケンジーの霊が教会の庭に現れることがある。その霊に出会った者は、血がにじむ程度の引つ掻き傷や擦り傷を負うと言われる。

・ヘリオット慈善学校 (Heriot's Hospital) 今もグレイフライヤーズ教会の西隣りにあるが、現在は、多くの政治家・文化人・スポーツマンを輩出する初等・中等のインディペンデント・スクール (George Heriot's School) である。しかし、当時はまだ、貧しい孤児たちを収容して教育する機関としてジョージ・ヘリオットの遺産で設立された養育院であった（一六二八年設立）。

・アイアングレー (John Welsh of Irongray 生没年不詳) 一七世紀スコットランド信仰誓約派運動の指導者のひとり。ジョン・ノックスの曾孫にあたる。本名はジョン・ウェルシュ。長老派監督牧師をしていたダムフリーズのアイアングレー監督区に因んだ愛称。